

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12307

研究課題名（和文）地域で暮らす子どもの母親支援；先天性心疾患を持つ子どもへの看護連携の構築

研究課題名（英文）Analysis of questionnaire survey on mother's parenting stress for infants with congenital heart disease

研究代表者

阿川 啓子（AGAWA, KEIKO）

島根県立大学・看護栄養学部・准教授

研究者番号：20709381

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：地域で暮らす乳幼児期の先天性心疾患を持つ子どもを育てる母親への包括的な支援体制の構築の為に、母親の育児ストレス調査を実施した。調査は2020年～2021年に実施、198名に配布し128名から回収した（回収率64.7%、有効回答数118名）。CHD児の年齢中央値は42.5か月。育児ストレスは、子育てを共に分かち合える人の存在（ $P=0.005$ ）と、子育ての大変さを理解する人の存在（ $P=0.024$ ）に影響されていた。子育てに関する共感者や理解者の存在が育児ストレスを軽減させており、育児ストレス緩和には、母親を身近で支える支援者の存在を確認し、適切なサポート体制の構築が必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先天性心疾患の治療進歩は目覚しく、救命率も上がり、CHD児の90%以上が成人へと成長している。医療資源の少ない地域においては、母親と医療従事者とのコミュニケーション支援として訪問看護師が注目されている。しかし、主養育者である母親の育児ストレスと訪問看護を含めた医療資源との関係を明らかにした研究は見当たらなかった。そこで、本研究では居住地の医療資源や訪問看護と母親の育児ストレスの関係について調査した。その結果、母親は同じような境遇にある支援者とのつながりが母親の育児ストレスを有意に減少させていたことが明らかになった。母親にはピアサポートでの支援を充実させることが必要と考えられた。

研究成果の概要（英文）： A parenting stress survey was conducted among mothers raising children with congenital heart disease during infancy. The survey was conducted in 2020-2021, distributed to 198 participants and collected from 128 (64.7% response rate, 118 valid responses) The median age of the CHD children was 42.5 months. Parenting stress was influenced by the presence of people with whom one could share parenting ($P=0.005$) and by the presence of people who understood the difficulties of parenting ($P=0.024$).

The presence of a sympathetic and understanding person regarding child rearing reduced child rearing stress, suggesting the need to establish an appropriate support system to reduce child rearing stress.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：先天性心疾患 乳幼児期 母親 育児ストレス 訪問看護 ソーシャルサポート

1. 研究開始当初の背景

日本の出生数は 100 万 5656 人 (H27) で増加傾向にあり、出生率 (人口千対) は 8.0 である。そのうち、先天性心疾患を持つ子どもは出生した児の約 1% の頻度で出生する。また、医療技術の進歩により、手術対象の年齢は下がり、先天性心疾患の患者全体の死亡率は年々低下、特に新生児・乳児期での生存率は飛躍的に向上している。そのため、地域で暮らす先天性心疾患を持つ子どもは増加している。そこで、そのような子どもの支援体制の整備は急務である。

2. 研究の目的

本研究では、地域で暮らす先天性心疾患を持つ乳幼児期の子どもを育てる母親に対して看護師がどのような介入をすることが母親の育児ストレスに影響を及ぼしているのかという現状と、実際に地域に点在する看護職者がどのように看護介入をしているのかを明らかにすることにした。

3. 研究の方法

1) 先天性心疾患を持つ 0~5 歳の子どもの母親の育児ストレスの現状把握

2) 先天性心疾患を持つ 0~5 歳の子どもと母親に関わる看護職者の看護介入の現状把握

上記 1) 2) より、母親の育児ストレスと看護介入との関係性について明らかにし、地域に点在する看護職者の役割 (支援内容) を専門会議で検討する。支援内容は、家族看護学、小児看護学、在宅看護学、公衆衛生看護学の視点で検討し、看護職者間と対住民の調整・相談・教育などの看護に着目して「看護連携：母親支援モデル」を提案する。その後、「看護連携：母親支援モデル」を試験的に導入し評価する。

しかし、2019 年からの COVID-19 の感染拡大にて、調査は 2 年間中断していた。

4. 研究成果

【文献レビューより】

「先天性心疾患患児の母親が経験するストレスの現状と児への影響」

CHD 児をとりまく問題としては、多くの CHD 児が成人となることから、生涯に渡り治療が必要となり、自立支援や成人への移行支援がある。学童期や青年期への自立支援への介入プログラムの報告はあるが、乳幼児期については少ない印象がある。乳幼児期の成育環境は、児の成長発達に大きく影響を及ぼすことから、児への自立支援に加え、親のストレス緩和や児の成長発達を促す支援も必要と考えられる。そこで、乳幼児期にある CHD 児の母親が経験しているストレスと児の発達への影響を明らかにすることにした。

<対象文献と方法>

CHD の国内外の文献：2013 年より急激に増えている 調査対象期間 2011 年~2021 年 10 月の 10 年間の PubMed、医学中央雑誌、J-STAGE に掲載されている “Congenital heart disease (先天性心疾患) and Mothers (母親) and stress (ストレス)” とした。分析内容は次の通りとした。

1) 対象文献を精読し概要を把握、2) 調査内容は、時期、ストレスの傾向、そのストレスが児に及ぼす影響に着目、3) 文献の類似性から各文献の知見を比較、特性を抽出。

<結果>

● ストレスの傾向について

【病的症状】

オーストラリアで出生から 3 か月までに手術を受けた親の調査では、母親 33.8%、父親 18.2% が急性ストレス障害であった (文献 5、2013)。米国で CHD の診断を受けた妊娠中 (在胎週数 27±3 週間) の母親は、外傷性ストレス 39%、うつ病 22%、状態不安 31% であった (文献 8、2013)。

【ストレスと感じている内容】

米国の調査では、食事の管理、乳児のカロリー摂取、経鼻胃管の受容、乳児の食事行動に苦悩していた摂食障害のある乳児の母親は、乳児の体重増加と養育者の睡眠不足にストレスを感じていた (文献 2、2012)。米国での調査では、CHD 児の母親は、怒り、悲しみ、孤独、無力感、混乱の感情を経験し、子どもに対する自責の念を抱きつつ、サポートネットワークが充実していないこと、経済的負担、感染症の対策、頻回な外来通院などというストレスを感じていた。父親は、先天性心疾患のストレスと要求を独自の方法で経験し、それに対応し、手術や痛みから子どもを守ることができないこと、および仕事とパートナーのサポートおよび病院での CHD 児の世話とのバランスを取ることが困難であることからストレスを感じていた (文献 26、2012)。エジプトの調査では、母親の 45% が診断について正しい知識を持ち、85% が臨床ケアに満足していた、79% は治療費が負担であった (文献 15、2015)。

【育児ストレスの高い母親の特徴】

オーストラリアでの調査では、育児ストレスの高い母親と乳児の社会的引きこもりは正の関連を認めた。一方、社会的引きこもりと心臓の異常および手術との間には関連は認めなかった (文献 14、2015)。米国の調査では、育児ストレスの高い母親は、ソーシャルサポートが少なく自己効力感が低い、または、CHD 児に同胞がいる母親であった。母親の自己効力感を改善する

ための介入は母親の育児ストレスを軽減する（文献 42、2021）。日本の調査では、子どもの出生順位が第一子であるときに養育不安や積極的回避が低いと達成要求は有意に高かった（文献 A5、2017）日本の調査では、育児ストレスは「子どもに問題を感じる」「退院後の気落ち」で高く、「夫との関係」で低かった。育児ストレスが高い母親は有意に「医師以外のスタッフの立ち会い」を必要とした。育児ストレスの高い母親は有意に「不安になった時に相談できること」を必要とし、「ピアカウンセリング」を必要とした（文献 A1、2012）。

【メンタルヘルス】

米国と英国での大規模合同調査では、軽度な心疾患の親のストレスは健康な子どもと同等であった。英国と米国の両親の間の違いはほとんどなかった。CHD の親は、乳児期の心臓手術後の不安、うつ病、ストレスのレベルの上昇を認め、母親のメンタルヘルスの問題は、先天性心疾患の子どもの心理的適応に悪影響を与える可能性があるとして示唆している（文献 27、2018）。

【妊婦のストレスと児の脳の発達との関連】

CHD の胎児を妊娠している妊婦：31 人（65%）ストレス、21 人（44%）不安、14 人（29%）うつ病、健康な胎児を妊娠している妊婦：25 人（27%）ストレス、24 人（26%）不安、8 人（9%）うつ病、CHD の胎児の海馬と小脳発達の障害が母親のストレスと不安のレベルの上昇と関連している（文献 36、2020）。

<考察>

CHD 児における未熟な小脳の機能的形成は不明であるが、障害のある小脳虫部および傍小脳虫部は、子どもや成人の感覚運動、社会行動、情動障害、左小脳葉の損傷は非言語的および視空間障害に関連している。これらの機能障害の多くは、心臓修復が成功した後の数年間に CHD の子どもで報告されている内容と一致していることから、妊娠中から母親のストレス緩和に努め、児が誕生したのちは、早期から海馬/小脳の機能を改善するような発達支援を取り入れた自立支援も検討する必要があると示唆された。

【先天性心疾患の乳幼児を持つ母親の育児ストレスのアンケート調査】

<目的>

CHD 児の母親の育児ストレスを調査し、その育児ストレスの傾向から今後の支援について検討する。

<方法>

X 大学小児科外来に受診歴のある 0～6 歳の CHD 児の母親を対象に、育児ストレスの無記名自記式調査を郵送法で実施した。分析は、IBM SPSS Statistics 25 を用い、記述統計および PSI-SF を従属変数とした重回帰分析を行った。

<結果>

198 名に調査票を配布し 128 名から回収した（回収率 64.7%、有効回答数 118 名）。CHD 児の年齢中央値は 42.5 か月、CHD の内訳は VSD：51 例、TOF：12 例、ASD：11 例の順で多かった。2015 年の先行研究との比較では、総合点は変わらなかったが、子どもの特徴に関するストレスは低く、親のパーソナリティに関するストレスは 2 歳と 6 歳で特に高かった。また、子育てを共に分かち合える人の存在（ $P=0.005$ ）と、子育ての大変さを理解する人の存在（ $P=0.024$ ）が育児ストレスに影響していた。

<考察>

2 歳と 6 歳の母親の育児ストレスが高く、2 歳は行動や自己表現の幅が広がり、母親は子どもの発達課題が気になる様になり、また 6 歳は就学に伴う母親の不安が高まる時期と考えられた。子育てに関する共感者や理解者の存在が育児ストレスを軽減させており、育児ストレス緩和には、母親を身近で支える支援者の存在を確認し、適切なサポート体制の構築が必要である。

【学会発表】

- (1) 阿川啓子、黒崎あかね、先天性心疾患患児の母親が経験するストレスの現状と児への影響、第 32 回日本医学看護学教育学会学術学会、オンデマンド開催（宇部）、2022 年 3 月。
- (2) 阿川啓子、安田謙二、黒崎あかね、金井理恵、コロナ禍における先天性心疾患児の母親の育児ストレスの現状、第 58 回日本小児循環器学会学術集会、札幌、2022 年 7 月。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 阿川啓子 石垣和子 大湾明美 金子紀子	4. 巻 11
2. 論文標題 中山間地域における地域文化に根ざした訪問看護師の終末期ケア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化看護学会誌	6. 最初と最後の頁 41 - 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿川啓子 谷口敏代 吉松恵子 伊藤重美	4. 巻 12
2. 論文標題 文化的な視点を導入した在宅看護論における看護基礎教育の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化看護学会誌	6. 最初と最後の頁 50 - 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿川啓子 黒崎あかね 石垣和子 塚田久恵	4. 巻 14
2. 論文標題 先天性心疾患の乳幼児を育てる母親の抱く育児ストレスの概観と支援の展望	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 島根県立大学出雲キャンパス研究紀要	6. 最初と最後の頁 13 - 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿川啓子, 谷口敏代, 吉松恵子
2. 発表標題 高齢化率65%の海岸地域の古民家を活用した在宅看護過程における教育の実践報告
3. 学会等名 日本ルーラルナーシング学会第14回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日下眞莉子、阿川啓子、加藤典子、吉松恵子
2. 発表標題 在宅移行期における重症心身障害児の父親の育児ストレス
3. 学会等名 日本看護研究学会第31回中国・四国地方会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 若葉志保、阿川啓子
2. 発表標題 母親が感じている離島における育児 島の文化に焦点をあてて
3. 学会等名 文化看護学会第10回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阿川啓子、黒崎あかね
2. 発表標題 先天性心疾患患児の母親が経験するストレスの現状と児への影響
3. 学会等名 第32回日本医学看護学教育学会学術学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿川啓子、安田謙二、黒崎あかね、金井理恵、
2. 発表標題 コロナ禍における先天性心疾患患児の母親の育児ストレスの現状
3. 学会等名 第58回日本小児循環器学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	金子 紀子 (KANEKO NORIKO) (30438171)	石川県立看護大学・看護学部・准教授 (23302)	
研究 分担者	石垣 和子 (ISHIGAKI KAZUKO) (80073089)	石川県立看護大学・看護学部・教授 (23302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------